

同所の第一期計畫としては十匹鹽基性平爐三基、坩堝爐一基、電氣爐一基中形ロール機二連小形ロール機一連を設備し品質に於ては普通市場向軟鋼を初とし鐵道院、製鐵所等の規格に準據すべき極軟鋼、硬鋼、最硬鋼、發條用鋼、鑛山用鋼、鑄用鋼、工具用鋼、高速度鋼、合金鋼、特殊鋼等寸法、形状に於ては丸、角三分以上六吋迄平鋼巾七吋迄其他五吋迄のアンゲル、ジョイスト、工形鋼及三十封度迄の軌條類にして一ヶ月千八百匹内外の製産をなし得べく既に平爐一基、中小形ロール機各一連の運轉を開始し本年七月を以て第一期計畫全部の完成を見るべく更に本年中に於て第二期計畫として、平爐二基電氣爐一基板及薄板ロール機各一臺コールド、ローリング機、コールド、ドロインク機各一連を設備して五尺×十尺迄の鋼板、薄板、磨シヤフト、鋼紐等の製作をなし更に工作部を増設して現今スプリング製作所の製品以外時計、著音機用の發條其他工具類の製作をも開始すべき計畫なり。

由來東京鋼材製作所の創設せられたる當初の目的は東京スプリング製作所使用の材料供給にあるを以て主として硬鋼の製造に従事し硬鋼のみを以てして其生産額全部の需用ある場合には普通軟鋼類の製作は方めて之れを避くべき方針を以て經營すべく高速度鋼其他の高級鋼より一般工具用硬鋼に至る所謂ハガネの製作を主としたる英國シエツフィールド市に於ける各製鋼所と同様の製品を出すべき抱負を以て計營の方針とせらるよし之れ鋼材製作所が近時簇出せる各製鋼所の計畫に異なる點にして世人に最も難しとする硬鋼及磨鋼棒及磨鋼組等の特殊製品を出し以て同業相競ふ弊を避けんとす。

●本邦各製鐵所の擴張と新設計畫一覽表

第一 鐵鑛を原料とする製鐵所

製鐵所名	所在地	大正三年		大正四年		大正五年		備考
		銑鐵	鋼鐵	銑鐵	鋼鐵	銑鐵	鋼鐵	
八幡製鐵所	筑前八幡	—	三三〇、九八	—	二六〇、〇〇〇	—	三三〇、〇〇〇	大正五年より十年迄に年々五萬匹宛増加する豫定 大正六年後半期には銑鐵十二萬匹鋼鐵八萬匹 十二匹一基六匹高爐一基を備ふ 十五匹一基 七十五匹高爐一基五十匹高爐一基増加
釜石田中製鐵所	陸中釜石	四一、六〇一	一四〇、〇四	四八、三〇〇	一六三、八	五〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	
仙人山製鐵所	同 岩崎	二六、五七	—	二八、四九	—	三〇、〇〇〇	—	
栗木製鐵所	同 江刺	一、四八	—	二、一八	—	二、〇〇〇	—	
輪西製鐵所	北海道室蘭	二五、〇六三	—	未詳	—	二七、〇〇〇	—	

此の後尤も困難なる硬鋼及特殊鋼を選びて製作に従事すべきを以て其設備に於ても多大の用意を以て普通私設製鋼所の範を脱し未だ製鋼を開始せざるに先て既に分析室の建築を終り化學、電氣分析の設備を整へて原料其他の選擇に便し研究室用としてユニバーサル、テストインク、マシン、プリンネル硬度計、電氣爐、寫眞器付顯微鏡。其他最新の各種試驗機。及試驗材料工作工場を備へ各専門技術者をして専ら製品の試驗製造方法改善其他鋼の製造、應用、加工法、性質等に關する一切の研究をなさしめ何れかの點に於て新發見又新發明をなすべき期待を以て努力し居れり而して製鋼部に於ては現時使用の材料の缺乏に備へんが爲め各種の新材料を以てシーメンス爐に應用の實地試験に着手し既に成算を得たるを以て本邦産にして併も從來利用の途なかりし砂鐵の利用其他に付きては近く其成績を發表するを得べく以て漸次缺乏を告げんとする屑鐵の代用品を發見することを得べきか。

而して本年中に工事に着手すべき電氣製鋼爐に付ては未だ研究中にして何れの式を採用すべきや疑問に屬するが故に之れを詳説すること能はざれどもシーメンス爐の利用と相俟ちて本邦に於ける電氣製鋼上に一新起元を畫する事を得べく高速度鋼、工具鋼及各種特殊鋼の如きは向後同所の特色として天下に誇るに足るべきもの出し得べきを信じ居れり若し夫れ其製品の種類の多様な併も未だ何れに於ても指を染めざる磨鋼棒磨鋼紐の製作に至りては同所が確信を以て江湖に問はんとする所なりと云ふ。

中鐵山製鐵所等も近き將來に於て起業せらるへし。

以上の外南滿鐵道株式會社、大倉組木炭鐵製鍊所、支那桃

附記 現に坩堝又は小轉爐を以て鑪地金、鑄鋼、工具鋼

等を造る工場は大阪及東京に工場を設けたる日本鑄鋼

工場名	所在地	現今の製品及其生産力	擴張又は新設に依る製品	擴張又は新設の生産力(年)	生産増加の開始時期	備考
各砂鐵製鍊所	鳥取、島根、廣島地方	二六一	未詳	二五〇〇		
本溪湖煤鐵公司	滿洲本溪湖	一四九	未詳	一五〇〇		
中國製鐵株式會社	備中大暮	一五〇〇	三三〇〇〇	四〇〇〇〇		大正六年には生産力六萬噸に達する見込
三菱製鐵所	朝鮮鎮南浦		五〇〇〇			十五噸高爐一廿噸高爐一
久原製鐵所	筑前戸畑					大正六年中に完成銑鐵十萬噸生産の見込
安川製鐵所	筑前黒崎					百五十噸高爐二基
眞幸製鐵所	大隅眞幸					目下計畫中
計		七五、六〇〇	九、三三七	三三、一〇〇		目下休止中

第二 銑鐵を原料とする製鐵所

工場名	所在地	現今の製品及其生産力	擴張又は新設に依る製品	擴張又は新設の生産力(年)	生産増加の開始時期	備考
日本鋼管株式會社	神奈川縣川崎	鋼管 一五〇〇〇噸	棒鋼	二四、〇〇〇噸	大正五年六月	廿五噸平爐二基二十噸二基
神戶製鐵所	神戶	鑄鋼及鍛鋼 一八、〇〇〇	鍛鋼材其他の鋼塊	三〇、〇〇〇	大正五年四月	十噸マルチン爐一基増設
川崎造船所	神戶	鑄鋼 十噸マルチン爐二基	鍛鋼材及棒鋼等	一〇、〇〇〇		十五噸マルチン爐一基増設
住友鑄鋼所	大阪	同 五噸同上	鍛鋼材及外輪			五十噸平爐二基廿五噸平爐四基五噸二基
日本製鐵所	大室	兵器(大砲其他) 六〇、〇〇〇				
大阪製鐵株式會社	大阪		棒鋼	一五、〇〇〇	大正五年中	
岸本製鐵所	兵庫縣尼ヶ崎	鋼塊	棒鋼線材等	二〇、〇〇〇	大正五年六月頃	二十五噸マルチン爐二基
日東製鐵株式會社	東京		發條鋼及棒鋼形鋼	一〇、〇〇〇		
東京鋼材製作所	東京	十噸平爐三基坩堝爐一基	線材	三〇、〇〇〇乃至四〇、〇〇〇		十噸平爐二基電氣爐一基増設
東京製鐵株式會社	福岡縣小倉		薄板亞鉛引板	三〇、〇〇〇乃至四〇、〇〇〇	大正五年八月頃	二十五噸マルチン爐一基
岩井製鐵所	山口縣徳山					
日本特種鋼合資會社	東京府大森	工具鋼其他の特種鋼				
藤田組製鍊所	福島縣會津在	工具鋼其他の特種鋼				
諏訪電氣製鋼所	長野縣上諏訪	工具鋼其他の特種鋼				
名古屋電燈製鋼所	名古屋	工具鋼其他の特種鋼	鐵合金			電氣爐一噸二分一

所、伯耆國米子製鋼所、同安來製鋼所、東京桑原鑄鋼場、東京大塚工場、等此他大阪地方に數箇處あり。

吳製鋼所其他兵器工場の製鋼爐數等は公表し能はざるを遺憾とす、鐵道院所屬工場も一二箇處に小轉爐を用ひて鑄鋼を造る處あり。

支那漢冶萍煤鐵鑛廠の銑鐵年產二十五萬噸なり、此内五萬噸は八幡製鐵所に供給し來れるか新設鑄鐵爐も二三年の後に年產額五十萬噸を出し、内二十萬噸乃至二十五萬噸は我國に供給し得るに至るへし。

●製鐵業調査會の設置

前號に豫報せる如く、製鐵業調査會の官制は本月六日發布せられたり、該調査會設置の趣旨及び委員任命の標準に就て、江木翰長の談に依れば、今回製鐵事業の調査會組織されたるは言ふ迄もなく、歐州戰亂のため鐵の需用の生じたるに、從來我國に於ては遺憾乍ら十分の產出を見ず、將來獨立自營を期するが爲め、今日に於て十分なる調査をなすを必要とし、茲に調査會を組織するに至りたるものなり、而して委員二十名内外を各方面より選定したるが、今日鐵を要求し居れる官廳は陸軍、海軍、鐵道院等なるに鐵を供給する官廳としては、僅に八幡製鐵所一箇所の外なし、尙民間側より之を見るも鐵を供給する所は、室蘭製鋼所あるのみなるが、之れとて原料を仰ぎて鋼を製造するに過ぎず、又一方に鐵を要求する者は、川崎、三菱の兩造船所を始め其需用の範圍極めて廣汎なり、故に委員任命の範圍も採鐵冶金の學者のみに限らず、鐵材使用の機械工業及び造船等に經驗ある學識者を擧げ供給するもの、供給を受くる者、兩者に對して違算なき調査を爲さしむるため、代表的人物を任命したる次第なり。云々

製鐵業調査會官制

第一條 製鐵業調査會は農商務大臣の監督に屬し其諮問に應じて製鐵業に

關する事項を調査審議す、調査會は製鐵業に關する重要事項に就き關係大臣に建議することを得
第二條 調査會は會長一人委員二十人以内を以て之を組織す、特別の事項を調査審議する爲必要あるときは前項の定員の外臨時委員を置くことを得
第三條 會長は農商務大臣を以て之に充つ、委員は農商務大臣の奏請に據り高等官及學識經驗ある者の中より内閣に於て之を命す
第四條 會長は會務を總理す
第五條 調査會に幹事を置き農商務大臣の奏請に據り農商務省高等官の中より内閣に於て之を命す、幹事は會長の指揮を承け庶務を整理す
第六條 調査會に書記を置き農商務大臣之を命す、書記は上司の指揮を承け庶務に従事す

製鐵業調査會委員

- 鐵道院技師工學博士 島 安 次 郎
- 陸軍少將 筑 紫 熊 七
- 海軍造船總監工學博士 福 田 馬 之 助
- 製鐵所次長工學博士 服 部 漸
- 正三位勳二等功四級男爵 中 村 雄 次 郎
- 正三位勳一等 高 崎 親 章
- 從三位勳一等工學博士 渡 邊
- 正四位勳二等工學博士 阪 田 貞 一
- 從四位勳三等工學博士 寺 野 精 一
- 正五位勳三等 松 方 幸 次 郎
- 從四位勳四等 和 田 維 四 郎
- 從四位勳六等工學博士 井 上 匡 四 郎
- 從四位工學博士子爵 大 河 内 正 敏
- 從五位 鈴 木 馬 左 也
- 從六位勳五等 丸 田 秀 實
- 原 田 鎮 治
- 門 野 重 九 郎
- 工學博士 香 村 小 錄